

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2010～2014

課題番号：22320121

研究課題名(和文) 認識方法としての歴史と規範としての歴史に関する国際的総合研究

研究課題名(英文) International Research on Cognitive and Normative Historiography

研究代表者

佐藤 正幸 (SATO, Masayuki)

山梨県立大学・国際政策学部・特任教授

研究者番号：90126649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：認識の学問として発達してきた西洋の歴史学(Cognitive Historiography)と、規範形成の学問として展開してきた伝統的東アジアの歴史学(Normative Historiography)を比較検討した結果、東アジアの歴史には規範的要素が強く、西洋の歴史には認識的要素が強いが、しかし、本来的に歴史は、洋の東西を問わず、認識的な要素と規範的な要素を内包していることを解明し、認識と規範という視点から、歴史の持つ文化的・歴史的・社会的役割を解明した。

研究成果の概要(英文)：A comparison of cognitive historiography as it has developed in European countries, and normative historiography traditionally pursued in East Asian countries has indicated that East Asian historiography continues to contain strong normative components, while Western historiography emphasizes elements of cognitive components. However, regardless of whether it is studied in the West or the East, historiography as an academic discipline has been shown to contain both normative and cognitive components. The cultural, historical, and social functions of historiography have been demonstrated in this project from cognitive and normative perspectives.

研究分野：史学一般

キーワード：歴史理論 歴史学史 歴史哲学 認識方法としての歴史 規範形成としての歴史 比較史学史

## 1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者は平成11-14年度に基盤研究(B)「西洋史学史における『認識としての歴史』の形成と発展」、平成13-15年度に萌芽的研究「『視覚化された世界像』と『思想としての世界観』の統合に関する思想史的研究」、平成17-20年度に基盤研究(B)「歴史学における規範と認識：21世紀歴史叙述の存立基盤に関する国際的総合研究」を実施した。

(2)そこでは、「歴史における道徳と科学」という視点に替えて「歴史における規範と認識」という新たな分析視点を設定し、認識の学問として発達してきた西洋の歴史学(Cognitive Historiography)と、規範の学問として展開してきた伝統的東アジアの歴史学(Normative Historiography)を比較検討した。その研究成果として、歴史学自体に内在する規範的要素と認識的要素の存在の整理・解明が必要であるとの結論を得た。本研究は上記のこれまでの研究成果を継続的に発展させたものである。

(3)本研究は、歴史学分野における数少ない日本発のオリジナルな研究であり、国内外を問わず類似の研究が皆無のため、世界的な反響を呼び、平成11年以降、海外の大学や国際学会から計57回の招待を受け、研究報告や講演を行ってきた。また、過去10年間の研究成果として、日本語著書2冊、英文共著3冊、英文論文6編・独文共著2冊・中国語論文3編・ポルトガル語共著1冊・日本語論文4編を公刊した。平成18年度には、海外から14名の参加者を得て日本学術振興会国際研究集会「21世紀の歴史学：学問・方法・教育」を主催した。

## 2. 研究の目的

東アジアの歴史には規範的要素が強く、西洋の歴史には認識的要素が強いが、本来的に歴史は、洋の東西を問わず、認識的な要素と規範的な要素を内包している。このふたつの要素を分析的に検討することで、歴史の持つ文化的・歴史的・社会的役割を解明するのが本研究の目的である。

具体的には以下の諸問題の解明を遂行した。

(1)歴史という概念そのものに内包されている認識的要素と規範的要素の解明。

(2)歴史叙述における認識的要素と規範的要素の比較考察。

(3)歴史的空間概念の表象形態における認識的要素と規範的要素の解明。

(4)歴史的時間概念における認識的要素と規範的要素の解明。

## 3. 研究の方法

(1)歴史における規範と認識という着想を学問的に研究・展開していく過程で、研究代表者は次のようなより一段進んだ着想を得るに至った。

(2)多くの文化は「絶対的存在と相対的存在」「完全なるものと不完全なるもの」「不動なるものと可動なるもの」というふたつの構成

要素からなる。究極的な揺るぎない絶対的存在を、多くの文化は全知全能の神を指定する啓示宗教に求めてきた。したがって、そのような文化では、過去を再解釈する新しいパースペクティブが常に提出され、歴史を書き直すことが可能であった。なぜなら歴史は相対的存在にすぎず、ひとつの認識方法に過ぎなかったからである。

(3)それに対して絶対神という概念を持たない東アジア文化は、人が依拠する絶対的なものを歴史に求めてきた。したがって、東アジアにおいては、歴史は規範的性格を帯びたものとなり、そのため権威的で書き換えを拒否する歴史文化が形成されてきた。これは「正史」という発想に現れている。

(4)それぞれの文化が今現在、何に絶対的根拠を置いているかは、法による統治が究極的に何に由来するかについて述べている世界各国の憲法前文を比較すると顕著である。キリスト教圏に属する国々の多くの憲法前文は、全知全能の神への言及が行われており、イスラム諸国の憲法前文はアラーの神への言及がなされている。これに対して東アジア文化圏に属する国々の憲法前文は、歴史に言及し、その歴史を統治権の根拠としている。そして、宗教への言及が一切無いという点でも、これらの東アジア諸国の憲法前文は共通した特徴を有している。(現行の日本国憲法はアメリカ人による制定なので、その前文には歴史への言及がないが、大日本帝国憲法前文には歴史への言及がなされている。)つまり、東アジア世界は2000年前から絶対的なものを歴史に求め、歴史を軸にした文化をつくりあげ、そして現在でもこの思考法は変わっていない。

(5)この方法は研究代表者だけのものであり、憲法学・法思想史の専門家はまだこの着想に至っていない。この新たな着想について、研究代表者はこれまで国際学会で9回研究発表を行い、世界の多くの研究者と討論をおこなった。その結果、地域的相違から着想したこの議論は、歴史学そのものに、或いは人間の過去認識そのものの中に内在する要素であるというより高次の着想を得た。

## 4. 研究成果

(1)平成22年度

平成22年度は、歴史という言葉はヒストリーの訳語として新たに導入されたにもかかわらず、両者の概念の差異が拡大せざるをえない文化的基盤について考察した。

歴史とヒストリーの概念の差違：啓示宗教を軸にした文化と歴史を軸にした文化においては、同じ「歴史」という言葉を使って「過去に対する人々の姿勢」を表現するが、ヒストリーと歴史とではその概念形成の過程において多くの文化的違いがある。この問題に関して研究代表者の論文"The Search for Scholarly Identity: Renaming the field of

history in late nineteenth-century Japan" をベースにして研究討議を行った。

歴史による義認:東アジアでは人間存在を歴史によって義とするのに対して、啓示宗教を持つ西洋及びイスラム文化では人間存在を神によって義とする。この義認(justification)の仕方の違いについて、研究代表者の論文“The Role and Function of History in the East and the West”をもとに研究討議を行った。

歴史とロゴス:啓示宗教を軸にした文化と歴史を軸にした文化の対比が本研究の根幹をなすが、この対比は、ロゴス(言葉)とプラクシス(行為)という概念の対比に置き換えることが可能か否かに関して、両者の差違と類似性について研究討議を行った。

歴史における認識と規範の問題に日本人として最初に取り組んだ明治時代の歴史家田中萃一郎の歴史理論を整理・研究した。

上記の研究成果の一部を 8 月 25 日にアムステルダムで開催された国際歴史学会議において、研究発表した。

#### (2)平成 23 年度

平成 23 年度は、東アジアの歴史叙述には規範的要素が強く、西洋の歴史叙述には認識的要素が強いが、本来的に歴史叙述は認識的な要素と規範的な要素を内包していることを解明した。

世界の文化にはその核心として、それぞれに異なる「不動なる文化の軸」を持つ。アブラハムの宗教(ユダヤ教・キリスト教・イスラム教)を持つ文化においては、神の声を記録した聖なる書物とその基軸となり、一方東アジア諸国においては、国家の編纂による歴史書が「不動なる文化の軸」を構成してきた。

東アジアにおいては『オデッセイ』のような叙事詩が存在せず、歴史のドラマ化が起らなかった。その一方で事実を忠実に記録した「正史」が連綿と書き継がれて来ている。これは歴史を「不動なる文化の軸」と位置づけたために、歴史の書き換えという発想が誕生せず、歴史は規範形成のためのものであると考えたからである。

上記の研究の成果を以下の国際学会で発表した。(A)“East Asian Civilization and Historiography,”The International Conference on Asian Civilizations.(中国社会科学院、北京)5 月 28 日。(B)“Grounding East Asian Civilization,” The International Conference on Contemporary World and East Asian Civilizations.(アサン研究所、ソウル)6 月 1 日。

#### (3)平成 24 年度

平成 24 年度は、歴史的空間概念における認識的要素と規範的要素の解明を行った。

歴史叙述、特に世界史叙述において、歴史家がイメージする世界像をコンピューター・グラフィックスの手法を用いて文字から

図像イメージに変換し、そこに現れた歴史意識を分析した。今回は、ヘロドトス・アウグスチヌス・イブン=ハルドゥーンについて研究した。

歴史地図文化と歴史年表文化:過去を理解するのに啓示宗教文化では歴史地図が多用され、東アジア文化では歴史年表が多用される。この歴史理解の違いは何に由来するのかを比較研究した。

上記の研究の成果を(A)英米文化学会第 30 回大会(山梨県立大学)及び(B)国際研究集会“Challenges and Future Perspectives of Historical Theory”, Poznan University (Poland)で研究発表した。

上記の研究成果を学術論文として発表した。Masayuki Sato, "A Social History of Japanese Historical Writing 1400-1800," in Jose Rabasa, Masayuki Sato, Edoardo Tortarolo, and Daniel Woolf (Eds.), *The Oxford History of Historical Writing 1400-1800*, Volume 3, (Oxford University Press, 2012), pp.80-102.

#### (4)平成 25 年度

平成 25 年度は、紀年意識の中でも特に年号と干支による紀年法・創世紀年法・キリスト教紀年法・イスラム紀年法等の間に見られる歴史的時間意識の規範性について考察し、これらの中でなぜキリスト紀年だけが世界共通紀年となることが出来たのかを紀年認識という視点から検討した。

編年型歴史文化と叙述型歴史文化に関して、編年史を重要視する東アジアの規範的要素の濃い歴史表現と、歴史はストーリーであると主張する啓示宗教文化における認識的要素の濃い歴史表現を比較考察し、本来歴史そのものの中に内在するふたつの要素のバランスが、なぜその表現形態において異なるのかを考察した。

上記の研究成果の一部をドイツ・ミュンヘンで開催された国際歴史教育学会で発表し、ドイツ・ポッフムで開催された国際歴史理論学会で発表した。加えて日本語の学術論文 1 編を刊行した。

#### (5)平成 26 年度

本年度は主として研究の総括を行った。研究実績として、学術論文 5 件と国際学会発表 6 件の成果を得た。中でも、*International Encyclopedia of Social and Behavioral Sciences* (Elsevier, 2nd edition, 2014)に掲載された研究代表者の 2 件の大項目論文 "Historiography and Historical Thought: East Asia" 及び "Time, Chronology and Periodization in History" は、本研究の根幹をなす成果である。

本百科事典は、当該研究分野における世界の最高権威が、執筆依頼を受けて著述したものである。つまり、本研究が歴史学の存在基盤に関する世界最先端の研究として、国際的に

認知された証拠である。加えて本研究は、日本人にしかできない独創的なアプローチであることを、世界の歴史家が認めた結果でもある。歴史分野の大項目執筆者 243 人中、日本人執筆者は、研究代表者を含めて 5 人である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

(1) 佐藤正幸「西ヨーロッパと東アジアにおけるヒストリオグラフィーのアーキタイプ研究に関する資料調査：カスリーン・ヒューズ『初期ケルト民族の歴史意識と現代の歴史家』の翻訳紹介 - 』『山梨国際研究』11(山梨県立大学, 2016)82-98.(査読有)

<http://www.yamanashi-ken.ac.jp/wp-content/uploads/kgk20160091.pdf>

(2) Masayuki Sato, "A World History for Citizens," *The Asian Review of World Histories*, 3-1, 155-158 (Seoul, Korea, 2015).(査読有)

[http://www.thearwh.org/journal/arwh\\_3-1\\_sato.pdf](http://www.thearwh.org/journal/arwh_3-1_sato.pdf)

(3) Masayuki Sato, "Time, Chronology and Periodization in History," *International Encyclopedia of Social and Behavioral Sciences*, 2nd edition, 24, (Elsevier;Leyden, 2015) 409-414.(査読有)

<http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/B0080430767026097?np=y>

(4) Masayuki Sato, "History and Historiography: East Asia," *International Encyclopedia of Social and Behavioral Sciences*, 2nd edition, 11, (Elsevier; Leyden, 2015) 48-53.(査読有)

<http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/B0080430767026139>

(5) 佐藤正幸「明治初期の英語導入に伴う日本語概念表記の変容に関する研究」『山梨国際研究』9 (山梨県立大学, 2014) 25-36.

<http://www.yamanashi-ken.ac.jp/wp-content/uploads/kgk20160091.pdf>(査読有)

(6) Masayuki Sato, "A Social History of Japanese Historical Writing", *Oxford History of Historical Writing*, vol.3 (Oxford University Press, 2012) 80-102. (査読有)  
<https://global.oup.com/academic/product/the-oxford-history-of-historical-writing-9780198738008?lang=en&cc=us#>

(7) 佐藤正幸「世界イメージの歴史的変容」『歴史学研究』878(歴史学研究会,2011)4-29. (査読有)

<http://rekiken.jp/journal/2011.html>

〔学会発表〕(計 11 件)

(1) Masayuki Sato, "Rekishu: From Chinese Official Historiographies to What Happened in the past," International Taipei Conference on the Basic History Terms, National Taiwan University, Taipei, Taiwan, 12 November 2016.

(2) Masayuki Sato, "The Role and Purpose of Historiography in East Asia," International Conference on the History of Twentieth Century Historiography, University of Athens, Greece, 20 June 2015.

(3) Masayuki Sato, "The World is One, but Histories are Many", AAWH International Conference, Nanyang Technological University, Singapore, 30 May 2015.

(4) 佐藤正幸「『市民のための世界史』の英文書評を書くことで見えてきた日本型歴史教育の特徴」、大阪大学歴史教育研究会、大阪市、2015年3月14日

(5) Masayuki Sato, "Politics of Chronology : Chronology Wars and the Engaged Historians", The International Conference: Historians as Engaged Intellectuals Bochum, Germany, 20 September 2013.

(6) Masayuki Sato, "Why has Christian Chronology been Using in the Post-Colonial Countries", The Annual Meeting of the International Society of History Didactics Tutzing, Germany, 17 September 2013.

(7) Masayuki Sato, "The Secular Turn and the Post Secular Turn in Our Cognitive Frames of Counting Years: Is the current Christian chronology a theological chronology? ", The International Conference: Challenges and Future Perspectives of Historical Theory, Poznan University, Poznan, Poland, 8 March 2013

(8) Masayuki Sato, "Grounding East Asian Civilization", The International Conference on Contemporary World and East Asian Civilizations, The Asan Institute for Policy Studies, Seoul, Korea, 1 June 2012.

(9) Masayuki Sato, "East Asian Civilization and Historiography", The Chinese Academy of Social Sciences International Conference on Asian Civilizations, Beijing, China, 25 May, 2011.

(10) Masayuki Sato, “Formation and Transformation of Images of the World”, The 21st International Congress of Historical Sciences Round Table Session Amsterdam University, Amsterdam, Netherlands, 25 August 2010.

(11) Masayuki Sato, “World Images in Japanese Historical Imagination”, The 21<sup>st</sup> International Congress of Historical Sciences, Amsterdam University, Amsterdam, Netherlands, 25 August 2010.

[図書](計 1 件)

(1) José Rabasa, Masayuki Sato, Edoardo Tortarolo, and Daniel Woolf (eds.), *The Oxford History of Historical Writing 1400-1800* (Volume3) (Oxford University Press: Oxford, 2012) 727pp.(査読有)  
<https://global.oup.com/academic/product/the-oxford-history-of-historical-writing-9780198738008?lang=en&cc=us>

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

佐藤 正幸 (SATO, Masayuki)  
山梨県立大学・国際政策学部・特任教授  
研究者番号：90126649

### (2)研究分担者

服部 一秀 (HATTORI, Kazuhide)  
山梨大学・教育学研究科(研究院)・教授  
研究者番号：60238029

石塚 迅 (ISHIZUKA, Jin)  
山梨大学・医学工学総合研究部・准教授  
研究者番号：00434233

高野 美千代 (TAKANO, Michiyo)  
山梨県立大学・国際政策学部・准教授  
研究者番号：10289811

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：